目次

第一講 演習問題⑴ …… p.2
第二講 演習問題⑵ …… p.8
第三講 演習問題⑶ …… p.14
第四講 演習問題⑷ …… p.20

第一講　演習問題(1)

次の文章は『讃岐典侍（さぬきのすけ）日記』の一部である。この日記は作者（讃岐典侍）と堀河天皇との親しい交流、および天皇没後の出来事を記している。次に掲げた箇所は、前段では、堀河天皇没後、新しい天皇の即位式を間近にした日、作者が自分の家から、院（白河院）たちがとり行う亡き堀河天皇のための法事に出かけていく時のようすを記し、後段では、内裏で行われる即位式当日の事柄を記す。この文章を読んで、後の問に答えよ。

十九日に、例の、参らんと思ふに、雪、夜よりも高く積もりて[1]こちたく降る。[注1]いそがしさ、いまいくほどなく残り少なくなりにたれば、おほかたの人も、夜を昼になして、ものも聞こえぬまでいそぐめれば、我は、この月ならんからにいそがしとて参らざらんが口惜しさに、出で立つを、[2]一人うけひく人なし。「[注2]さばかりいそがしくし散らかせ給うてよかし。今日参らせ給ひたらんに、院も大臣殿も、[3]よにいみじともあらじ。参らせ給はずとも、悪しきこともあらじ。かばかり雪は道も見えず降るめり。我が御身こそ、車の内なればさてもおはしまさめ、御供の人は、いかでか堪（た）へんずるぞ」など、わびあひてとどめつれど、「人たちによしと思はれんとて参ることならばこそあらめ、この月ならんからに、いそがしとて欠くべきことかは、[4]いさましくうれしきいそぎにてあらんだに、それに障（さは）るべきことかは。我を少しもあはれと思はん人は、今日は参ら

せよ」と言ふままに、気色(けしき)も変はるがしるきにや、言はれぬる人ども、「さばかり思しめし立たんこと、妨げ参らすべきことならず。車寄せよ」と、供の人呼ばせなどするほどに、例始まるほどと思ふほど、やうやう日たくるに、[5]参らでやみなんずるなめりと思ふ、口惜しくわりなきに、「人ども[6]来ぬれば。とく」と言へば、うれしくて乗りぬ。

道のほど、まことに堪へがたげに雪降る。車の内に降り入りて、雑色(ざふしき)、牛飼ひ、みな頭(かしら)白くなりにたり。牛の背中も、白き牛になりにたり。二条の大路には、[注3]大宮の道もなきまで降る。

参りたれば、人々、「あな、いみじ。例よりも日たけつれば、『今日はえ参らせ給はぬなめり。ことわりぞかし。いそがしくおはしつらん』と申しあひたりけるに、[7]おぼろけならぬ御こころざしかな。今日は」とあはれがりあひたり。

十一月も、はかなく過ぎぬ。

十二月朔日(ついたち)、まだ夜をこめて[注4]大極殿に参りぬ。西の陣に車寄せて、[注5]筵道(えんだう)敷きてゐるべき所とてしつらひたるに、参りぬ。

ほのぼのと明け離るるほどに、瓦屋どもの棟、霞みわたりてあるを見るに、昔、[注6]内へ参りしに、過ぎざまに見えしほどなど、思ひ出でられて、つくづくとながむるに、北の門より、長櫃(ながびつ)に、[注7]ちはや着たるものども、蘇芳(すはう)の濃き、[注8]打ちたるくはう

こくの出し衣（いだしぎぬ）入れて、持ちて続きたる、別におもしろく見ゆべきことならねど、所がらにや、めでたし。人ども、見さわぎ、いみじく[8]<u>心ことに思ひあひたる気色どもにて</u>、見さわげども、[9]<u>ただ我は、何ごとにも目も立たずのみおぼえて</u>、南の方を見れば、例の、[注9]八咫烏（やたがらす）、見も知らぬものども、[注10]大頭（おほがしら）など立てわたしたる見るも、夢の心地ぞする。

注1　いそがしさ―即位式に臨む準備のいそがしさ。
注2　さばかりいそがしくし散らかせ給うてよかし―「自分でよけいいそがしくしたいのならそうすればよい」という、まわりの人たちが作者に投げかけた非難めいた言葉。
注3　大宮―法事の行われる堀河院御所。
注4　大極殿―天皇即位式の行われる内裏にある建物。
注5　筵道―通路に敷く敷物。
注6　内―内裏。
注7　ちはや―衣装の一種。
注8　打ちたるくはうこく―砧（きぬた）で打って光沢を出した衣装の一種。
注9　八咫烏―八咫烏の飾りを先端につけたのぼり。
注10　大頭―即位式に使う旗の一種。

問一　傍線部１「こちたく降る」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　心地よいほど降る。
イ　はなはだしく降る。
ウ　こちらへ向かって降る。
エ　いつまでもいつまでも降る。
オ　身体に当たって痛くなるほど降る。

問二　傍線部２「一人うけひく人なし」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　同意する人がだれもいない。
イ　話し相手になってくれる人がだれもいない。
ウ　私の仕事を手伝ってくれる人がだれもいない。
エ　私一人にしておいてくれる人がだれもいない。
オ　私の袖を引いて連れて行ってくれる人がだれもいない。

問三　傍線部３「よにいみじともあらじ」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　世間では普通なことだとお思いになるでしょう。
イ　はなはだ熱意のあることだとお思いになるでしょう。
ウ　それほど殊勝なことだとお思いにならないでしょう。
エ　世の中によくあることだとはお思いにならないでしょう。
オ　これからもずっとそうであるとお思いになるかどうか分かりません。

問四　傍線部４「いさましくうれしきいそぎにてあらんだに、それに障るべきことかは」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　気持ちが高揚するほどうれしい即位式であるのに、そのための準備や法事などがあって、差し障りの多いことだ。
イ　法事にいそいそ出かけることはうれしいことであるが、まわりの人を説得するのに勇気がいり、差し障りの多いことだ。
ウ　まわりの人々の反対を押し切ることが難しく、それが法事に出かける差し支えになるのだとしたら、しかたのないことだ。
エ　気持ちが浮き浮きするようなうれしい即位式の準備であってさえも、それが法事に出かける差し支えになるだろうか、ならない。
オ　雪の中をいそいで出かけるのは勇気がいり、大変なことでさえあるが、それが法事に出かける差し支えになるだろうか、ならない。

問五　傍線部５「参らでやみなんずるなめりと思ふ」とあるが、どうしてこのように作者は思ったのか。次の中から最適なものを選べ。

ア　いつものように法事を始めるために、何日でも参加者を待っているだろう、と思ったから。
イ　いつものように自分のしたくにてまどってしまい、そのうちに日も高くなってしまった、と思ったから。
ウ　いつものようにぐずぐずしているうちに、出かけて行く気がなえてしまい、どうでもよい、と思ったから。
エ　法事をいつものように始める前に、雲に隠れて日がなかなか出てこず、取りやめになるだろう、と思ったから。
オ　まわりの者が賛同してくれず、ぐずぐずしているうちに、法事が始まる時間になってしまった、と思ったから。

問六　傍線部６「来」の読みをひらがなで書け。

問七　傍線部７「おぼろけならぬ御こころざし」とはだれの「御こころざし」のことを言っているのか。次の中から最適なものを選べ。

ア　院　　イ　人々　　ウ　大臣殿　　エ　堀河天皇　　オ　作者

問八　傍線部８「心ことに思ひあひたる気色どもにて」の意味として最適なものを次の中から選べ。

ア　格別なことだとお互いに思っているようすで。
イ　普通と違ってお互いのことを思っているようすで。
ウ　意外なことだとお互いが思っているようすなので。
エ　気持ちをお互いに高めあうようなまわりのようすで。
オ　気持ちがことさら緊張しているとお互いに思っているようすで。

問九　傍線部９「ただ我は、何ごとにも目も立たずのみおぼえて」とあるが、どうして作者はこのように思うのか。次の中から最適なものを選べ。

ア　常にひかえめな性格なので、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
イ　まわりの人々とは年齢も違い、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
ウ　亡き天皇のことを大切に思い、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
エ　前の天皇が亡くなった後、病気がちになり、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。
オ　見慣れている光景ばかりなので新鮮味が感じられず、新たな天皇の即位式の祝いに気持ちがついていかないから。

第二講　演習問題(2)

左の文章は『源氏物語』の一節で、光源氏が紫の上と物語や女子教育について語る場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

紫の上も、(注1)姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。(注2)くまのの物語の絵にてあるを、「いとよく描(か)きたる絵かな」とて御覧ず。

「姫君の御前(おまへ)にて、この(1)世馴れたる物語など、な読み聞かせたまひそ。(注3)みそか心つきたるものの娘などは、をかしとにはあらねど、(2)かかること世にはありけりと見慣れたまはむぞ、(3)ゆゆしきや」とのたまふも、(4)こよなしと、(注4)対の御方聞きたまはば、心置きィたまひつべくなむ。上、「(注5)心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。(注6)宇津保の藤原君(ふぢはらのきみ)の女(むすめ)こそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、(注7)すくよかに言ひ出でたるしわざも、女(をんな)しきところなかめるぞ、(5)一様(ひとやう)なめる」とのたまへば、「(6)うつつの人も、さぞあるべかめる。人々しく立てたるおもむき異(こと)にて、よきほどにかまへぬや。よしなからぬ親の、心とどめて生(お)ほしたてたる人の、(注8)子めかしきを生(い)けるしるしにて、(7)後れた

ること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるるこそ(8)いとほしけれ。げにさ言へど、(注9)その人のけはひよと見えたるは、かひあり、おもだたしかし。言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることのなかに、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、(9)いかで人ほめさせじ」など、ただ「この姫君の、(注10)点つかれたまふまじく」と、よろづに思しのたまふ。継母（ままはは）の腹ぎたなき昔物語も多かるを、「(10)心見えに心づきなし」と思せば、いみじく選（え）りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせ□たまひける。

注
1 姫君―明石の姫君。源氏が明石の上との間にもうけた娘で、紫の上に育てさせていた。
2 くまのの物語―当時存在した物語の書名。今日には伝わっていない。
3 みそか心―異性を恋しく思う気持ち。
4 対の御方―源氏の養女、玉鬘（たまかづら）。日ごろ物語を愛読していた。
5 心浅げなる人まね―物語を読んで、思慮もなくそれをまねること。
6 宇津保の藤原君の女―『宇津保物語』のヒロイン貴宮（あてみや）。多くの男から求婚されたが、それを拒絶して春宮に入内（じゅだい）した。
7 すくよか―生真面目すぎて愛嬌に乏しいようす。
8 子めかしきを生けるしるしにて―子供のように純真であるということだけを、せめてものとりえとして。
9 その人のけはひよ―さすがにその身分にふさわしいようすだな。
10 点つかれたまふ―非難をお受けになる。

(A) ――線部イ・ロは、それぞれ誰に対する敬意か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選べ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

1 源氏　2 姫君（明石の姫君）

3 紫の上　4 対の御方（玉鬘）

イ＝　ロ＝

(B) ～～線部を、句読点とも十五字以内で現代語訳せよ。

(C) ――線部(1)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

1 世間ずれがしている

2 庶民的でおもしろそうである

3 本当にありそうである

4 世俗の知恵に富んでいる

5 男女間の情に通じている

(D) ——線部(2)について。「かかること」とはどのようなことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選べ。

1 義理の親子関係の難しさ
2 俗世間のいろいろな煩悩
3 男女間における恋愛
4 果てしない人間の欲望
5 人を欺くさまざまな策略

(E) ——線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

1 重大事だ
2 不幸だ
3 当然だ
4 浅はかだ
5 さすがだ

(F) ——線部(4)について。「こよなし」と思う内容は何か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選べ。

1 源氏が紫の上を愛していること
2 源氏が姫君を大切にしていること
3 源氏が物語を好んでいること
4 紫の上が姫君を大切に育てていること
5 紫の上が物語を好んでいること

(G)――線部(5)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

1　いつの時代でも同じように高い評価が得られないでしょう
2　いつも同じように彼女は冷たい人だと感じさせるのでしょう
3　思慮もなく人まねをする女と同じようによくないでしょう
4　世間にありふれている、つまらない女だと思わせるのでしょう
5　近ごろの若い女性に共通して見受けられる現象でしょう

(H)――線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

1　理想に対する現実　　2　虚構に対する現実
3　過去に対する現在　　4　正気に対する夢心地
5　夢に対する目覚めた状態

(I)――線部(7)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

1　後の残されたこと　　2　後になって知ること　　3　劣っていること
4　先立たれること　　5　気づくのが遅いこと

(J)――線部(8)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

1　面倒だ　　2　興ざめだ　　3　気の毒だ
4　困りものだ　　5　残念だ

(K) ——線部(9)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

1　どうしても私をほめずにはおられまい
2　どうしても人々がほめるに違いあるまい
3　どうしても継母の評価を言わせないようにしよう
4　どうにかして人々を高く評価しないようにさせよう
5　どうにかして娘をほめさせないようにしよう

(L) ——線部(10)について。「心見えに心づきなし」という思惟内容には、誰の誰に対する配慮が表現されているのか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選べ。

1　源氏の姫君に対する配慮
2　源氏の紫の上に対する配慮
3　源氏の玉鬘に対する配慮
4　紫の上の姫君に対する配慮
5　紫の上の玉鬘に対する配慮

第三講　演習問題(3)

次の文章は、江戸時代の怪異小説集、林九兵衛『玉櫛笥』の一部である。ある男が、老婆に連れられて、ある女性を覗く場面から始まる。これを読んで、あとの問いに答えよ。

うれしさかぎりなくて、跡につきて行く程に、かの妻戸の奥なる障子の破れよりのぞきてみれば、御前には灯火いとあかかりけり。まぎるべきやうもあらず、よく見えたり。かの后のうつくしさ、言の葉もいひがたし。しばしありて、障子の内より十二三ばかりの女、赤きあこめ着たるが一人出でて、御前の灯火をらふそくにうつして、妻戸のあひへ出て、御廊下の縁の石におきぬ。花のひかりもかかやきて、月の夜よりもなほ見所おほき心地して艶なり。

后の、花の散るを見いだし給ふ御さま、いふばかりなく見え給ふ。1表の方は、なほうしろめたくやおぼすらん、わがのぞくかたは、おほかたなれば、人ありとも覚しめしよらぬにや、灯火近くめしよせ、障子の色紙の歌など①御覧ぜらるる。「今ぞ御顔はよくみたてまつりけり。あさ夕つかふ人だにも、かばかり御前ちかくは［A］」と尼のいふにぞ、いとうれしくて見る内にも、わがこころのはては何となるべきと、我が心からいぶせく、2また世に似たるといふ人もあらじとかなしく、こ

の御すがたをいつの世に忘れんと、たましひもなき心地(ここち)して、いかがせんと思ひわづらひ、時うつりけるも覚えず、②ながめゐたり。

やや久しくありて、おもてのかたに[3]車のきこゆ。すは中将とおもふところに、灯火をあふぎけちて御簾(みす)おろしければ、ありつるらふそくの火、ほのぼのと見ゆるばかりにて、[3]車の音も表(おもて)を過ぎければ、もしあらぬ人にや、と聞くに、[3]車おしまはす音して、ありつる築地(ついぢ)のくづれとおぼしきところより、[3]車をとどめて、そこより人の③入るおとしてきこゆれば、[4]かの尼のいひし歌もここぞかし、今も築地のくづれよりかよひ給ふよ、関守(せきもり)はなきやらんと、むかし忘れ給はぬこと、をかしく、尼のいひしこと思ひあはせて不思議なる。

さてもいづかたより上がり給ふとも覚えぬに、はや妻戸のうちへ人のさし入るけしき見えてければ、これぞ在五中将のおはしまし、后にしのびてちかより給ふなりと見る所に、さきの十二三の女、いそがしく灯火を持ちかよふとて、いかがしたりけん、あやまちてそばにかかりたる御きぬにとりおと[5]しかば、やがて燃えつき、あはやと見る内に、俄(にはか)に嵐(あらし)はげしく屏風障子に吹きつけ、おびたたしく燃えあがり、炎(ほのほ)四方(よも)に飛び散りて、煙(けぶり)立ちおほひければ、業平も后も[6]炎の中にて消え失せ給ふ。

人々おどろき、泣き叫び、逃げまどふ。武平次、興さめおどろき出づるに、方角を失ひ、垣(かき)をやぶり築地を越えて、歩(あゆ)むともなく、ころぶともなく、走り帰り、やうやう夜の明け方に平野(ひらの)のほとりまで逃げ出でたり。ここにて息つぎ、休みて、いかに焼けあがりて民家(みんか)騒(さわ)ぐらんと、また元(もと)の道に戻り、雲林院(うんりんゐん)の方(かた)へ行くに、人すこしも騒がず、焼亡(せうぼう)のけしきもなし。あやしみながら、ゆふべの古御所(ふるごしよ)を尋ぬるに、あとかたもなし。

急ぎ立ち帰り、太田道灌入道に逢ふて、かうかうの事ありしと語る。道灌まゆをひそめ、「先年、赤松美作守(あかまつみまさかのかみ)といふ人も、雲林院のほとりにおいて、かかる怪異(けい)を見しと聞きつたふ。これ業平、二条の后の幽霊なるべし。業平、后のただ人にもあらず、帝にまゐり給へるを、ひたすら忍び、かたらひ給へる邪淫(じやいん)の罪によりて、なほ今の世までも同じ思ひの炎にこがれ、ともに苦患(くげん)をうけ給ふ輪廻(りんゑ)のほどこそ浅ましけれ。さればつらつら④思ふに、伊勢物語に書ける業平一生の所行(しよぎやう)を、初学(しよがく)の人あしく心得(こころえ)、艶にやさしきふるまひなりとうらやみ、好色(かうしよく)の方人(かたうど)とし、陰陽(いんやう)の神なりとあがむるは、いかばかりのあやまりぞや」とて、これより7みづからもたやすく伊勢物語の沙汰せられざりしとかや。

問一 傍線部１「表（おもて）の方（かた）は、なほうしろめたくやおぼすらん」の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　障子に破れがあるのが不安である。
ロ　色紙の歌が読めるか心許ない状態である。
ハ　尼君が歌の説明をしてくれるかわからない。
ニ　外の方から男の人に覗かれるのが不安である。
ホ　玄関から中将が来るかもしれないのが不安である。

問二 空欄 A に入る最も適切な言葉を次の中から一つ選べ。

イ　見ず　　ロ　聞かず　　ハ　見奉らず
ニ　聞きつらん　　ホ　見奉りたり

問三 傍線部２「また世に似たるといふ人もあらじとかなしく」とあるがなぜか。その理由として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　女性を見るうちに出家心が芽生えたから。
ロ　自分の和歌の力量にあきらめが付いたから。
ハ　このような美しい女性を見ることができたから。
ニ　自分と同じ人間はこの世にいないと悟ったから。
ホ　このように美しい女性がこの世の者ではないから。

問四　傍線部①〜④の動作主体として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

イ　后　　ロ　尼　　ハ　武平次
ニ　太田道灌　　ホ　在五中将

①＝　　②＝　　③＝　　④＝

問五　傍線部３「車」が四箇所に出て来るが、それぞれどのような関係にあるか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　すべて同じ車を指している。
ロ　一番目の車と、それ以降の車は異なる。
ハ　四番目の車と、それ以前の車は異なる。
ニ　一、三番目の車と二、四番目の車は異なる。
ホ　一、二番目の車と三、四番目の車は異なる。

問六　傍線部４「かの尼のいひし歌」として最も適切な和歌を次の中から一つ選べ。

イ　春日野のわか紫のすり衣しのぶのみだれかぎり知られず
ロ　人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななむ
ハ　月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
ニ　白玉かなにぞと人の問ひしとき露とこたへてきえなましものを
ホ　おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとてながめ暮らしつ

問七　傍線部5「しか」と文法的に同じ「しか」を含む用例はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　見ざらましかばと思さる
ロ　しかおはしましあへるに
ハ　さてはいみじくとこそ覚えしか
ニ　見聞かずだにありにしかなと思ふに
ホ　なかなかになにしか人を思ひそめけむ

問八　傍線部6「炎」の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　帝が業平と二条の后を恨んで燃やす嫉妬の炎である。
ロ　灯火を煽いで消そうとして御簾に燃え移った炎である。
ハ　武平次が古御所で夜に見た、夢の中の輪廻の炎である。
ニ　十二三の女がわざと灯火を落として燃え上がった炎である。
ホ　邪淫の罪により、何度も業平と二条の后を燃やす炎である。

問九　傍線部7「みづからもたやすく伊勢物語の沙汰せられざりしとかや」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　自分からすすんで伊勢物語を読むようになったとかいうことだ。
ロ　自分でも軽々しく伊勢物語の講義などをしなくなったとかいうことだ。
ハ　自分でも容易に伊勢物語を好色の本と言わなくなったとかいうことだ。
ニ　自分でも軽々しく伊勢物語を仏教の書とは言わなくなったとかいうことだ。
ホ　自分からすすんで伊勢物語を仏教の書としてみなすようになったとかいうことだ。

第四講　演習問題(4)

次の甲・乙はそれぞれ、平安末〜鎌倉初期の歌人藤原隆信の家集（個人歌集）の一節である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

甲

母にはべりし人、こころざしはかたみにおろかならずながら、中将成家、定家など、その妹たちもあまたうち続き出できて、後は我が身ひとつ父変はりたる身にて、いと心細ながら、それにつけても、いよいよこころざしは浅からず思ひ交はして過ぎはべりしに、心よりほかなることによりて、年の三とせまで[1]相向かふことも無かりしを、たまたま仲良くなりて、日ごろ月ごろの恨みも忘れて、あはれにかなしくのみ思ふほどに、その年のきさらぎのころ、はかなく見なしつるを、かかりけるものゆゑ、三とせまでいぶせくて過ぎにけるかなしさも、いよいよ限りなく、また、ありありてかく今はの時にも仲良くなりて、後のわざなど、本意のままに宮づかひつる親子の契りの深さも、ひとかたならずおぼえて、法性寺といふ所の山の奥に納むとて、泣く泣くおぼえける

三とせまで恋ひつつ見つる面影をあかでや苔の下に朽ちなむ

おのおの忌みに籠り合へる中に、少将定家、[2]この母のおぼえなりけるを、かの少将、ことわりも過ぎて思ひかなしみて、我が身ひとつのことになむはべりけるとて、いたう嘆き沈みて、ひとつうちなれど、文に書き続けて言ひ遣はしたるを見るにつけても、いとどかなしさまさりて、返りごとに書き添へはべりし

数ならぬ身にだにあまるかなしさは君をとふべき言の葉も無し

少将、これを見るに、いとどせきやる方無きことなど書きて

墨染めに同じたもとをやつしても我をやとへと[3]思ひ置きけむ

まことに誰よりも、さこそは思ひくづほれたまふらめと書きて、また、これより

やつれぬる袖にもなほやまさるらん[4]思ひ置きけむ色の深さは

かくて春も暮れぬれば、名残りさへ［5］尽き果てぬる心地して、卯月の一日、またかの少将のもとへ

[6]ことしこそ惜しまで春を過ぐしつれまさる別れに心くだけて

　二日は四十九日なりければ、返し

過ぎ果つる名残りこそげにかなしけれ昨日のながめ明日のほどなさ

乙

五条三位入道、昔はまことの親にもまさりて、こころざし浅からず頼みきこえりしを、やうやう年積りて後、母なども亡くなりはべりて、かの入道もやそぢに余り、我が身もまたむそぢに余りて後、世を遁れてはべりしに、いとあはれに、昔今のことなど懇（ねんご）ろに書き続けられて、せめてのこころざしのあまりに、歌に一句を添ふるよしなどはべりて

みどり児と思ひし[7]人も老いぬとて背く世を見るかなしさはゆめかうつつか

返し

ありて無き夢もうつつも誰にかくとはれまし[8]君が見る世に背かざりせば

この感涙尽きせず、抑へ難きあまりに、これより、返しの奥に書き添へはべりし

もろともにとはまし人も亡き後に君一人あはれかくるも夢かとぞ思ふ

返し

もろともにあらまし[9]人の亡き後のかなしさは夢路ばかりに逢ふを待ちつつ

（『藤原隆信朝臣集』による）

注

五条三位入道…藤原俊成のこと。隆信の母、美福門院加賀の再婚相手。成家、定家らは、俊成と加賀の間にできた子どもである。

問一 甲の傍線部1・2の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ。

1

イ 兄弟仲良くすることも無かったが、
ロ 自分から折れることも無かったが、
ハ 仲違いをしたわけでも無かったが、
ニ 親しく対面することも無かったが、

2

イ この母にそっくりだったのだが、
ロ この母に深く愛されていたのだが、
ハ この母の評判を気にしていたのだが、
ニ この母の記憶を深く留めていたのだが、

問二 甲の傍線部3・4「思ひ置きけむ」の主語は同じ人物である。それは誰か。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ 隆信　ロ 加賀　ハ 定家　ニ 成家　ホ 俊成

問三 甲の空欄 5 には、これ以前の部分に複数回用いられている三字以内の副詞が入る。最も適切な語をそのまま記せ。

問四　甲の傍線部６「ことしこそ惜しまで春を過ぐしつれ」と表現されたのはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　あくまでも今年だけが例外なのであって、春を惜しむ人情は変わらないものだったから。
ロ　今年こそは春が去り行くのを惜しく思うまいと心に決めており、その通りとなったから。
ハ　春の別れがいつになく惜しく思われるのは、今年が特別な年となったせいであったから。
ニ　行く春が惜しいわけでなく、ひどく悲しい事が起こったため、一層思いがつのったから。
ホ　春が終わるのを惜しむのが毎年の習慣であったが、今年はそれどころではなかったから。

問五　乙の傍線部７・９の「人」は、それぞれ誰を指すと考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　隆信　　ロ　加賀　　ハ　成家　　ニ　定家　　ホ　俊成

７＝　　　　９＝

問六　乙の傍線部８「君が見る世」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　隆信が生きた前世
ロ　俊成が生きる現世
ハ　隆信が生きる現世
ニ　俊成がおもむく来世
ホ　隆信がおもむく来世

問七　甲・乙の内容と合致する最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　隆信は母に対する愛情を強く抱いていたが、母が再婚したため不如意な人生を送った。
ロ　定家は母をめぐって隆信に嫉妬したが、母の死後に、ようやく和解することができた。
ハ　隆信にとっても定家にとっても母の死は大きな衝撃であり、その思いを通い合わせた。
ニ　老齢に達した俊成は、亡妻の子である隆信を見舞ったが、俊成は既にややぼけていた。
ホ　俊成と隆信は、同時に出家を遂げ、ひたすら極楽往生を願う信仰の日々を送っていた。

問八　甲と乙とでは、取り交わされる「和歌」の形式が異なっている。それはどのように異なっており、また、なぜ生じたと考えられるか、**四十字以上五十字以内**で記せ。冒頭を一字下げにする必要はない。なお、句読点や符号等も一字とし、それらが行頭行末にきても、必ず一つのマス目内に記すこと。また、末尾は必ず句点で閉じること。

模範解答

第一講

〔解答〕

問一　イ	問二　ア	問三　ウ
問四　エ	問五　オ	問六　き
問七　オ	問八　ア	問九　ウ

〔現代語訳〕

十九日に、いつものように、（亡き堀河天皇の月命日の法事に私は）参上しようと思うが、雪が、夜から高く積もってはなはだしく降る。（即位式に臨む準備の）忙しさは、（即位式まで）もうどれほどもなく残り少なくなってしまったので、家の者もみな、昼夜関係なく、話もできないほどに急ぐようなので、私は、この月だからといって忙しいということで参上しないのが残念で、出かけるのだが、同意する人がだれもいない。「自分で余計いそがしくしたいのならそうすればよい。今日参上なさっても、院も大臣殿も、それほど殊勝なことだとお思いにならないでしょう。参上なさらなくても、悪いこともないだろう。これほど雪は道も見えないほどに降るようだ。ご自分は、牛車の中なのでそれでもよくていらっしゃるが、お供の人は、どうして耐えられようか」など、（みな）迷惑に思って止めたけれども、（私が）「人々によいと思われようとして参上するならやめもしようが（そうではないので）、この月だからといって、忙しいということで休んでよいことか、いや、よくない。気持ちが浮き浮きするようなうれしい即位式の準備であってさえも、それ（が法事）に（出かける）差し支えになるだろうか、（いや、）ならない。私を少しでも気の毒だと思う人は、今日は参上させよ」と言うにつれて、顔色も変わるのがはっきりわかったのだろうか、言われた人々は、「それほどご決心なさることを、お妨げ申し上げてよいことではない。牛車を寄せよ」と、供の人を呼ばせなどするうちに、いつも（法事が）始まる頃と思ううち、だんだん日が高くなるので、参上しないで終わってしまうのであるようだと思うことが、残念でひどくつらいが、「供の人が来たから。早く」と言うので、うれしくて（牛車に）乗った。

道中、本当に耐え難い様子で雪が降る。牛車の中にも降り込んで、雑色や牛飼いは、みな頭が白くなってしまっている。牛の背中も、白い牛（のよう）になっている。二条大路には、法事の行われる堀河院御所の道もなくなるほどに降る。

参上したところ、人々は、「ああ、殊勝なこと。いつもよりも日が高くなってしまったので、『今日は、参上なさることができないのであるようだ。もっともだよ。忙しくていらっしゃるのだろう』とみなで申し上げていたのに、並々ならぬ（あなた〔＝作者〕の）お気持ちですねえ。今日は」とみな感じ入っていた。

十一月も、あっけなく過ぎた。

十二月一日、まだ夜が深いうちに大極殿〔＝天皇即位式の行われる内裏にある建物〕に参上した。西の陣に牛車を寄せて、筵道を敷いて控え所として支度してある所に、参上した。ほのぼのと夜が明けた頃に、瓦葺きの御殿の棟が、一面に霞んでいるのを見ると、昔、内裏へ参上した時に、通りがけに見えた様などが、ふと思い出されて、しみじみと物思いにふけっていると、北の門から、長櫃に、ちはやを着た者たちが、蘇芳色の濃いのや、砧で打って光沢を出した衣装の出だし衣を入れて、持って続いたのは、特別におもしろいと見えるはずのことではないが、場所柄であろうか、すばらしい。人々は、見て騒ぎ、たいそう格別なことだとお互いに思っているようすで、声を上げて見ているけれども、ただ私は、（亡き天皇のことを思い）何事にも目も止まらず冷めるばかりに思われて、南の方を見ると、いつものように、八咫烏の飾りを先端につけたのぼりや、見も知らないもの、即位式に使う旗の一種などを並べ立ててあるのを見るにつけても、夢のような心地がする。

第二講

〈模範解答〉

（A）イ　4　ロ　1
（B）読み聞かせなさいますな。（十二字）
（C）5　（D）3
（E）1　（F）2
（G）3　（H）2
（I）3　（J）3
（K）5　（L）2

〈現代語訳〉

紫の上も、明石の姫君の御注文にことよせて、物語については捨てがたくお思いになっている。『くまのの物語』で絵に描かれてあるのを、「本当に上手に描いてある絵だわ」と言ってご覧になる。

（源氏が）「姫君の前で、この男女間の情に通じている物語など、読み聞かせなさいますな。異性を恋しく思う気持ちを持つ何かの娘などは、おもしろいというのではないが、このようなこと〔＝男女間における恋愛〕が世の中にはあるのだなあと見慣れなさるとしたら、重大事だ」とおっしゃるのも、「（自分に対する扱いと）違いがはなはだしい〔＝源氏が姫君を大切にしている〕」と、対の御方〔＝玉鬘〕がお聞きになったら、きっとお思いになるだろう。紫の上が、「物語を読んで、思慮もなくそれをまねることは、はたから見るにもみっともないことです。『宇津保物語』の貴宮は、とても落ち着いていてしっかりした人で、間違いがないようだが、生真面目すぎて愛嬌に乏しく口に出して言うことも、女らしいところがないようなのは、（思慮もなく人まねをする女と）同じよう（によくない）でしょう」とおっしゃると、（源氏は）「（虚構に対する）現実の人間も、

そうであるようだ。人並みにもっている意向が異なっていて、ちょうどよくふるまえないのだよ。身分や教養などが低くはない親が、気にかけて育てあげた人が、子供のように純真であるということだけを、せめてものとりえとして、劣っていることが多いのは、どんなことをして大切にしてきたのかと、親のしたことまでも自然に思いやられるのは気の毒だ。なるほどそうは言うものの、（娘を見て）さすがにその身分にふさわしいようすだなと思われるのは、（育てる）かいがあって、面目の立つことだよ。言葉をつくして（周囲の人が）恥ずかしいくらいにほめておいたのに、（本人の）しでかしたこと、口にしたことの中に、（こちらに）なるほどと見えたり聞こえたりすることがないのは、たいそう見劣りすることである。総じて、優れていない人には、どうにかして娘をほめさせないようにしよう」など（とおっしゃり）、ただ「この姫君が、非難をお受けにならないように」と、何につけてもお思いになっておっしゃる。継母の意地が悪い昔物語もたくさんあるのだが、（源氏は）「（継母の）心を見透かされることで（紫の上のためにも）気にくわない」とお思いになるので、きびしく選んでは選び、書き集めさせ、（源氏は）絵などにも描かせなさった。

第三講

〈解答〉

問一 ニ　問二 ハ　問三 ハ

問四 ① イ　② ハ　③ ホ　④ ニ

問五 イ　問六 ロ　問七 ハ

問八 ホ　問九 ロ

〈現代語訳〉

（男〔＝武平次〕は）うれしいことこの上なくて、（老婆の）後について行くときに、その妻戸の奥にある障子の破れたところからのぞいて見ると、御前には灯火がとても明るく灯っていた。見間違えようもなく、よく見えた。その后の美しさは、言葉では言い尽くせない。しばらくして、障子の中から十二、三歳ぐらいの女で、赤い袙を着ている女が一人出て来て、御前の灯火をろうそくに移して、妻戸の間へ出て、御廊下の縁の石に置いた。花の美しさも輝いて、月の夜よりももっと見所の多い気がして優美だ。

后が、花が散るのを見ていらっしゃるご様子は、言葉で言い表せないように見えなさる。外の方から（男の人に覗かれないかと）やはり不安に思いなさっているのだろうか、自分が覗いている方は、普通のところなので、人がいるとも思いもよらないでいらっしゃるのだろうか、灯火を近くに取り寄せ、障子の色紙に書いてある歌などを（后は）ご覧になる。「今、お顔はよく拝見しました。朝夕お仕えする人でさえも、これほど御前近くでは拝見しない」と尼が言うので、（男は）たいそううれしくて見るうちに、自分の心は最後にどうなってしまうのかと、自分の心ながら気がかりで、またこの世に似ているという人もいないだろうと愛しく、このお姿をいつ忘れることがあろうかと、分別も失うような気がして、どうしようかと思い悩み、時間が経つのも忘れて、（男〔＝武平次〕は）眺めていた。

ややしばらくして、表の方で車の音が聞こえる。そら中将（がいらした）と思うところに、灯火をあおいで消して御簾を下ろしたので、先ほどのろうそくの火は、ほのかに見えるだけで、車の音も表を過ぎたので、もしかして別の人だろうか、と聞くと、車がいらっしゃる音がして、先ほどの築地の崩れと思われるところから、車を止めて、そこから人〔＝在五中将・在原業平〕が入る音が聞こえるので、この尼が言っていた歌もここだよ、今も築地の崩れから通いなさるよ、関守はいないのであろうかと、昔を忘れなさらないことが、おもしろく、尼が言ったことを思い合わせて不思議である。

それにしてもどこからお上がりになるともわからないが、すでに妻戸の中へ人が入る様子が見えたので、これこそ在五中将がいらっしゃり、后に密かに近寄りなさる様子であると見るところに、さっきの十二、三歳の女が、忙しそうに灯火を持って来ようとして、どうしたのだろうか、誤って側にかかっていた御衣に落としてしまったので、すぐに燃え尽き、あれよと見ているうちに、急に激しく嵐が屏風障子に吹き付け、激しく燃え上がり、炎が四方に飛び散って、煙が立ち覆ったので、業平も后も炎の中で消え失せなさる。人々は驚き、泣き叫び、逃げ惑う。武平次は、我に返って驚いて出るが、方角を見失い、垣根を壊し築地を越えて、歩くともなく、転ぶともなく、走り帰り、やっとのことで夜明け頃に平野の辺りまで逃げ出した。ここで一息入れて、休んで、どんなに焼けて民家が騒いでいるだろうと、また元の道に戻り、雲林院のほうへ行くと、人は少しも驚かず、焼失した様子もない。不思議に思いながら、昨夜の古御所を訪ねると、跡形もない。

（武平次は）急ぎ立ち帰り、太田道灌入道に会って、かくかくしかじかのことがあったと語る。道灌は眉をひそめて、「先年、赤松美作守という人も、雲林院の辺りで、このような怪異を見たと聞き伝えている。これは業平と、二条の后の幽霊に違いない。業平は、后が普通の身分ではなく、帝に入内なさっていたのを、ひたすら人目を忍んで、親しくなさった邪淫の罪によって、なお今の時代までも同じ思いの炎に焦がれ、ともに苦患を受けなさる輪廻の様子が驚きあきれる。そういうわけで（私〔＝太田道灌〕は）つらつら思うと、『伊勢物語』に書いてある業平一生の所業を、初学の人が間違って理解し、優美で風雅な振舞だとうらやみ、色好みの味方とし、陰陽の神だとあがめるのは、どれほどの過ちであることか」と言って、これ以降自分でも軽々しく『伊勢物語』の講義をなさらなかったとかいうことだ。

第四講

〔模範解答〕

問一　1 ニ　2 ロ　**問二** ロ　**問三** いとど　**問四** ホ
問五　7 イ　9 ロ　**問六** ロ　**問七** ハ
問八　甲は通常の短歌形式で、乙は五音の句が一句多い。それは型に収まりきらない詠者の思いがあるからである。（四十九字）

〔現代語訳〕

甲

（私〔＝藤原隆信の〕）母でございました人〔＝美福門院加賀〕は、（親子の）愛情は互いにいい加減なものではないが、（母が俊成と再婚し）中将成家、定家など、その妹たちもたくさん続いて生まれて、後には我が身一人が父が異なる身の上であって、たいそう心細いながらも、それにしても、ますます愛情は浅くなく互いに思い交わして過ごしていましたが、思いもつかぬことによって、三年の間親しく対面することも無かったが、たまたま仲良くなって、長い年月の恨みも忘れて、しみじみと心がひかれるとばかり思っているうちに、その年の二月の頃、（母が）死去したことに出会い、こういうことになったために、三年の間不仲のまま過ぎてしまった悲しさも、いよいよ限りなく、（しかし）また、結局はこのように（母の）臨終の際にも仲良くなって、死後の法要など、本来の願い通りお仕えした親子の契りの深さも、並々ならずに思われて、法性寺というところの山の奥に（母の亡骸を）納めようとして、泣く泣く思った（歌）、

　三とせまで…＝三年もの間、恋い慕いつつ（離れて）見ていた（母の）面影を飽くことなく覚えているのに、墓の下で朽ちてしまうのだろうか。

各自が喪に服している中に、少将定家は、この母に深く愛されていたのだが、この少将は、道理にもまして思い悲しんで、我

が身一つのことでございましたと言って、ひどく嘆き沈んで、同じ家の中であるが、文に書き続けてよこしてきたのを（私は）見るにつけても、ますます悲しさが募って、返事に書き添えました（歌）

数ならぬ…＝人数にも入らぬ私の身にさえあり余る母の死の悲しさのため、あなたを見舞う言葉もない。

少将は、この歌を見ると、ますます涙をせき止めるすべもないということなどを書いて

墨染めに…＝墨染の同じ喪服に身をやつしても、私を見舞っておくれと（亡き母は）思い残したのであろうか。

本当に誰よりも、（少将は）そのように悲しみに思いくずれていらっしゃることでしょうと（私は）書いて、また、こちらから

やつれぬる…＝やつれてしまった袖の色の深さにも勝っているだろう。（亡き母が）思い残した気持ちの深さは。

こうして春も暮れたので、春の名残までもますます尽き果てた心地がして、四月の一日に、またこの少将のもとへ

ことしこそ…＝（例年は春を惜しむのが習慣であったが）今年は（母の死去で）春を惜しむこともなく過ごしてしまった。悲しさがまさる（母との）別れに心が砕けて。

二日は四十九日であったので、（少将からの）返歌、

過ぎ果つる…＝過ぎてしまった名残こそ実に悲しい。昨日の物思いや明日がすぐやってくるのを考えると。

乙

（母の再婚相手の）五条三位入道〔＝藤原俊成〕は、昔は実の親にも勝って、（歌への）志を深く頼み申し上げていたが、次第に年を重ねた後、母なども亡くなりまして、その入道も八十路を過ぎて後、私の身もまた六十路を過ぎた後、（私は）出家をしましたが、たいそうしみじみと、昔や今のことなどを（父俊成は）熱心に書き続けなさって、はなはだしく思いがあり余るために、歌に一句を添え加えることなどがございまして

みどり児と…＝愛しい子と思っていた人〔＝作者・隆信〕も年老いたと思って（いたら）、出家した姿を見る悲しさは、夢なのか現なのか。

（私からの）返歌

ありて無き…＝生きていた人も亡き世になり、夢なのか現なのか、誰にこのように尋ねられただろうか。あなた〔＝俊成〕

が生きる現世で（私が）出家しなければ。

この感涙は尽きることなく、抑えがたいあまりに、こちらから、返歌の奥に書き添えました（歌）

もろともに…＝一緒に対面したい人〔＝母・加賀〕も亡くなった後に、あなた一人が私に哀れみをかけてくれるのも、夢かと思う。

（俊成からの）返歌

もろともに…＝一緒に生きてほしい人〔＝妻・作者の母・加賀〕が亡くなった後の悲しさよ。夢の中だけでも逢うことを待ち続けて。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。